

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

生き物と関わる姿から掴める成長／富田林市立伏山台幼稚園

初めての園生活の子どもだけではなく、進級した子どもたちも、新しい保育室での生活や仲間、先生との出会いに戸惑う姿も見られる頃でしょうか？ そうした心の動きを、サッと晴らしてくれる「ダンゴムシ」。

今年度はどんな出来事があるのでしょうか？
今回は、ダンゴムシと関わる4歳時の姿と5歳時の姿をご紹介します。



● ダンゴムシ／4～5歳児

4歳4月 ダンゴムシに初めて出会う。

興味津々の様子。

「ダンゴムシ発見！」「かわいい」「私も触りたい！」「わぁ。丸くなった！」「僕のが！」「私のダンゴムシやで」

保育者の読み取り・関わり

集団生活のスタートであり（2年保育4歳児）、ダンゴムシを自分のものとして独占したい様子が見られる。じっくりと関わる時間を保障し、親しみをもって関わるように保育者がモデルとなる。

園内のいろいろな場所に行きダンゴムシを探す姿が出てきた。
ダンゴムシを見つけたことを友達と喜び合う姿が出てきた。
「どこにいるかな」「飼いたい！」

保育者の読み取り・関わり

ダンゴムシを身近に感じている子どもたちの気持ちを大切にするために、ダンゴムシの家を準備する。時間を保障したことで、園内のいろいろな場所を子ども自身で探すことができた。



テレビ視聴『しぜんとあそぼ（だんごむし）』や絵本『ぼく、だんごむし』（文：得田之久 絵：たかはしきよし 出版：福音館書店）が、ダンゴムシについて知るきっかけとなる。

ダンゴムシの食べ物に興味をもち、枯れた葉っぱをダンゴムシにあげる。

「ダンゴムシって落ち葉が好きなんや」「また、見つけたよ」「キャベツも食べるねんて」「なんでやろう？」

保育者の読み取り・関わり

テレビや絵本、今までの経験で知っていることを出し合って話し合う姿が見られる。ダンゴムシに親しみをもち始めた時期であるからこそ、一人一人が考えようとする姿に繋がった。

見つけたダンゴムシの入れ物の中の様子を見て「なんかダンゴムシの家にダンゴムシいっぱい」と言う。

保育者の関わり

「狭いね。どうする？」と問いかけ、関わりの様子を見守る。

ダンゴムシの入れ物の中の様子を見て「家、大きくしてあげよう！」「箱を大きくしてあげよう！」「砂場の土！」「葉っぱ！」と話す。

すると今度は「葉っぱのある土って？」と、葉っぱがたくさんある土とはどのようなものかイメージできない様子になる。葉っぱがたくさんある土について、5歳児に尋ねる。

保育者の関わり

子どもの言葉を受けながら「大きくするにはどうする？」「じゃあ、土は？」「ダンゴムシは何が好きかな？」と問いかけ、子どもとやりとりをしながら関わりの様子を見守る。イメージができない様子を把握し、「年長さんに聞いてみる？」と問いかける。

5歳児に「葉っぱのいっぱいある土ってどこにある？」と尋ねると、「森にあるで」と教えてくれた。そこで森に土を取りに行く。

子どもたちは「森の土ってフワフワしてる」「ダンゴムシもいっぱいいる」「ダンゴムシって森の土が好きなんや」と言い合う。

森で沢山のダンゴムシを発見して驚く。葉っぱ、木片などにたくさんいることに気付く。

保育者の読み取り

実際に森に行き、森の土の感触・匂いを感じることができた。また、森の中にダンゴムシが沢山いることを知り、ダンゴムシは森の土が好きだと考えたようである。



4歳11月 ダンゴムシの冬眠

毎日、ダンゴムシの家を覗き込み様子をうかがう姿が見られる。

「ダンゴムシって、いろんなもの食べるね」「赤ちゃんがいる」「かわいい」など、赤ちゃん誕生に気付き観察する。

保育者の関わり

興味をもったダンゴムシを、より知って欲しいという保育者の思いがあり、何度も声をかけたり絵本などを活用したりする。

森遊びの中で、カタツムリの冬眠を見たことを思い出し、ダンゴムシの冬眠に落ち葉が必要なことを考え出した。

「森に連れて行ってあげよう」「カタツムリも森で寝てたよ」と話し合う。ダンゴムシは冬眠のため森に逃がす。

保育者の関わり

ダンゴムシが冬眠することを知らせるとともに、ダンゴムシにとって、より良い冬眠の場を、子どもたちと考える機会を設ける。

5歳4月 ダンゴムシとの再会

ダンゴムシを発見し喜ぶ。子どもたちは「ダンゴムシいてた！起きたんや」「春だよー」「この子は男の子」「この子は女の子」「また、お家作るっつ」「ダンゴムシって壁（コンクリート）が好きなんかな？いっぱいいてる」「お花の上の方にも登ってるで」「足は、14本やな」と話している。

保育者の読み取り・関わり

去年は好奇心で関わりを楽しんでいた子どもたちだったが、足の数、オスメスの区別を自分で見て、考えて言う姿があった。

ダンゴムシと関わる子どもの姿を受け止め、子どもの発見をともに喜び、共感し、クラスに広めていく。

+ 考察

- 4歳児が心ゆくまで、じっくりとダンゴムシと関わる時間を確保した。そして保育者が、子どもたちと一緒に一つ一つの事象を新鮮に受け止め、絵本やテレビなどの視覚教材を活かして援助してきたことで、子どもたちはダンゴムシに親しみをもち、友達のように思い関わることができたのではないか。
- 4歳児がダンゴムシの家を作る段階で、幼稚園の隣にある『森』を活用したことは、整備された人工的ではない自然そのものの土に触れるいい機会となった。また、森で生活しているダンゴムシと出合ったことが、森の土＝ダンゴムシの好きな土と子どもたちの中で認識されたように思う。
- 常に『ダンゴムシにとってどうだろう？』と子どもたちに声をかけてきたことで、子ども自身がダンゴムシの特性（好きな食べ物・好きな場所など）を考えながら関わろうとする姿に繋がっていったように考える。
- 5歳児になりダンゴムシと再会し、主体的に関わる子どもたちの姿から、昨年には見られなかった、足の本数や雄・雌の見分けや生態等、細かなところまで関心をもつようになったことが分かった。『5歳児だからダンゴムシと遊ぶのは幼い』という先入観があったが、繰り返しそのものと関わることで視野が広がり、学びが深まっていくことが分かった。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」